

ARTURIA Origin

フックアップ
☎03-6240-1213

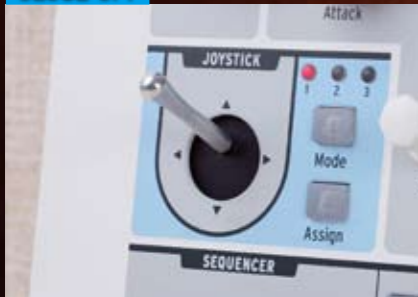
価格:オープン・プライス(市場予想価格294,000円前後)

文:坪口昌恭 / 撮影:新木宏尚

エミュレート・シンセの雄、アトリア社から初のハード・シンセが登場



CLOSE UP!



パネル左側にあるジョイスティック。複数のモジュール・ソースをXY軸にアサインしてフレキシブルに音色を変えられることができる。

CLOSE UP!



操作パネル中央部。ディスプレイ両脇に並ぶ白いツマミには自分の好きなパラメーターをアサインでき、感覚的にエディット可能。

CLOSE UP!



モーグMinimoogのテンプレートも内蔵されており、実機さながらの音作りが楽しめる。今後はほかの機種テンプレートも追加される。



▲リアパネルの端子類。左から、ヘッドフォン、インプット(R、L)、マスター・アウト(R、L)、AUXアウトx8、S/PDIFアウト、エクスプレッション・ペダル、フット・スイッチ、MIDI(IN、THRU、OUT)、USB、DC IN、電源スイッチが並ぶ。

アナログ機の全機能をモジュラー化

パッチは4パートまで同時使用可能

ツマミ類で思いのままに制御

モーグModular、アーブ2600、ローランドJupiter-8、ヤマハCS-80、シーケンシャル・サーキットProphet VSなど、歴代名機のエミュレーション・ソフトシンセで抜群の評価を誇るアトリア社初のハードウェア・シンセサイザー。大きな液晶とたくさんのツマミが並ぶ、品の良いルックも相まって、期待に胸が高鳴る。

独自技術による存在感のある音をツマミで直感的にエディット

アナログ・シンセをデジタル技術でシミュレートしたハードウェア音源は、かつてのノードNord Leadをはじめとして多数リリースされてきた。それらは、単にビンテージ機のシミュレートにとどまらず、ポリフォニック発音数、オシレーター自体のパリエーション、複雑なモジュレーション、マルチティンバーといったデジタルならではの魅力を兼ね備えている。その中でも、新たに発売された本機は突出した魅力を持ち合わせているようだ。

アトリアのソフトシンセは、TAE(True Analog Emulation)という独自の技術により、アナログ回路ならではの特性を忠実に再生することを可能としている。実際、同社のMoog Modular VやARP 2600 Vの出音を聴いて、デジタルとは思えない存在感に圧倒され、これさえあれば、かさばる上にメンテナンスも要するビンテージ・シンセを持つ必要はないと感じるユーザーが増えたのではないか。それくらい優秀な仕上がりのエミュレート・シンセを世に出しているブランドであるアトリア社から、この度、ハードウェア型のシンセ音源がリリースされたとなれば、期待しないわけにはいかない。

本機をマスター・キーボードとMIDI接続して電源を入れれば、即座にプログラム・モードまたはマルチ・モードで演奏が可能である。マルチ・モードでは、最高4つまでのプログラムをレイヤー／スプリットで演奏できる。プログラム(音色パッチ)はテンキー&プラス/マイナス・キーで選択する。400あるパッチをざっと試奏してみたところ、実に存在感のある、輪郭のはっきりしたプリセット音が次々と飛び出してきた。ビンテージ・シンセ音は太く切れがあり、一方デジタルな

らではの金属的で繊細な動きをするパッド・サウンドやシーケンス・フレーズも魅力的だ。意外とエレピやジャズ・ギター、オルガンの音色も秀逸である。それらの音色を、オシレーターやフィルター、エンベロープなどのツマミで、リアルタイム・エディットできることが、ハード型音源としての最大の魅力であろう。

デジタルならではのと言えるのがMacro Filter機能。複数あるフィルターをひとまとめにして1つのツマミで可変できるので、微妙に複雑な変化が得られる。また、パネル左側でひと際存在感を放つジョイスティック。これによって、複数のモジュレーション・ソースをXY軸にアサインして音色可変ができる。これらの機能は特にパッド・サウンドやシーケンス・フレーズなどをリアルタイムに変化させるのに効果的である。エフェクターも3系統内蔵しており、右側のセクションで簡単にオン/オフ、レベル調節できるのがうれしい。

中央の液晶画面の下には、Home、Preset、Progr、Edit、Multi、Seq、FX、Liveという8つのタブがあり、用途に応じてページ画面を切り替えて使用する。どのページ状態でも、テンキー&プラス/マイナス・キーによってプログラム(音色パッチ)を変えられるのは便利である。

歴代名機のおシレーターやフィルターを装備

内部の構成をEditページで見ると、オシレーターの種類として、“Minimoog”“ARP 2600”“CS-80”“Jupiter-8”“WaveTable”独自の“Origin”という6種類、またフィルターも“Minimoog”“ARP 2600”“CS-80”“Jupiter-8”“Origin”の5種が用意されており、これだけのサウンドを一気に手にすることができるのはなんとぜいたくなことか。それらビンテージ・シンセの特性を再現したモジュールの組み合わせによって、自由自在なサウンド作りが可能となっている。ただ、それぞれのモジュールを、ロータリー・エンコーダーで選択/プッシュによって詳細を確認しエディットするといった使い方に慣れる必要がある。また現バージョンでは、いち早く音作りに専念するためにMinimoogのテンプレートだけが用意されているが、今後のバージョン・アップにより、ドローパー・オルガン、Jupiter-8、CS-80のテンプレートも加わることが、アトリアのサイトでアナウンスされている。

気の利いた機能として、Editページでそれぞれのモジュールを選択し、液晶画面両サイドの

8つのツマミを、可変させたいパーツにアサインすることが可能だ(ツマミを“プッシュ”することにより選択される)。それら8つのアサイン状態はLiveページにて確認でき、名前のとおりライブ・パフォーマンス時に活用しやすくなっている。

シーケンス・セクションでは、3系統のシーケンスを同時に生成、走らせることができる。下段の16個のツマミとボタンでパターンをエディットし、それらの保存が可能となっている。シーケンスのステップ数は1~32まで可変で、変拍子や3の倍数を使ったアフロ・ポリリズムなども生成できる、その柔軟性がありがたい。

中央の液晶画面はとて視認性が高く、デザイン性にも優れているが、コルグTritonやローランドV-Synthなどを操作したことのあるユーザーにとっては、タッチパネルとして機能していないところがややもどかしいだろう。また、音色をエディットしている途中で元の音色を確かめるための“Compare”ボタンがないのが不安である。もう1点、アフタータッチの表現力が素晴らしいにもかかわらず、その設定が少々面倒なのが残念である。それらの点はバージョン・アップでの改善を期待するとしても(Compare機能はバージョン・アップで対応予定とのこと)、ここまで歴代名機たちのサウンド特性を含有し、自由度高く音作りができるのは前代未聞であり、まさに夢のシンセサイザー!と言えるだろう。“金属パネルに木材縁取り”という、個人的に良質なシンセと認め得るポイントもクリアしている。

SPECIFICATIONS

- モード:プログラム・モード、マルチ・モード[音源部] ●同時発音数:32音 ●音源システム:TAE(True Analog Emulation)
- オシレーター:9(Minimoog、ARP 2600、CS-80、Jupiter 8、Prophet Vからのエミュレートを含む) ●ウェーブテーブル:4 ●フィルター(切り替え可能なマルチ・モード・フィルター):4(アナログ・エミュレーション1、2&4ポール・ローパス、ハイパス、バンドパス/ノッチ) ●VCA:4 ●ミキサー:5 ●リング・モジュレーター:1 ●フェーダー:2 ●Bodフッター:1 ●LFO:ポリフォニック=4、モノフォニック=2 ●エンベロープ:8(ADSR) ●ギャラクシー・モジュール:1 ●2Dエンベロープ:1 ●Minimoogテンプレート ●エフェクト(1プログラムにつき3系統使用可能):5(コーラス、ディレイ、リバーブ、ディストーション、デュアル・フェイザー) ●ステップ・シーケンサー(3基同時使用可能):32ステップ・シーケンサー ●アルベジェーター:5 ●パッチ数:プログラム=400プリセット+600ユーザー、マルチ=100プリセット+156ユーザー ●コントローラー:21ポテンシオメーター、33エンコーダー、1ジョイスティック ●ディスプレイ:320×236 pixels LCD(32,768色) ●電源:DC6.5V ●外形寸法:482(W)×290(D)×87(H)mm ●重量:8kg